春 岡 村 の 伝 説

ソバ畑と五穀

前回のキツネの伝説は、お酒に酔った深作の人が岩槻からの帰り道、ソバ畑を歩いても歩いても深作村にたどりつけない、というお話でした。ソバは五穀に含まれないので年貢で持っていかれる心配もなく、自家用として育てていたようです。では、五穀はなにをさすのでしょう。古事記では「イネ、ムギ、アワ、ダイズ、アズキ」日本書紀では「イネ、ムギ、アワ、ヒエ、マメ」が五穀とされています。

さて、今回は春岡村を離れて、五穀の始まりを神代の時代にさかのぼってみましょう。

古事記によると、高天原を追放されたスサノオノミコトは食べものを求めてお姉さんのオオゲツヒメを訪ねます。オオゲツヒメは鼻や口、そしてお尻から様々な食材を出して調理しました。それを見てしまったスサノオは「よくも汚いものを食べさせたな」と怒りまくって、オオゲツヒメを斬り殺してしまいました。すると、死んだオオゲツヒメの頭からカイコが生まれ、目からイネ、耳からアワ、鼻からアズキ、股からムギ、尻からダイズが生えてきました。それをカミムスビ神が集めて人間に与えました。

（今回参考にした斉藤洋著『古事記』は児童向けですが大人が読んでもおもしろいです。）

日本書紀では、天照大神（アマテラスオオミカミ）に命じられ、月読命（ツクヨミノミコト）は保食神（ウケモチノカミ）の様子を見にいきました。喜んだウケモチは陸を向いて口から米飯を吐き出し、海を向いて魚を吐き出し、山を向いて獣を吐き出し、これらでもてなしたところ、ツクヨミは「吐き出したものを食わせるのか」と怒り狂い、ウケモチを斬り殺してしまいました。すると、ウケモチの死体の頭のてっぺんから牛馬、額からアワ、眉からカイコ、目からヒエ、腹からイネ、股からムギとダイズ、アズキが生えました。これをアマテラスから遣わされた天熊人（アメクマヒト）という神が持ち帰ったところ、アマテラスは大いに喜んで「これは人々が生きていくために必要な食物だ」と言って、田畑の作物や養蚕の種にしました。

（※）挿絵は江戸時代に描かれた「職人尽絵詞、人倫重宝記」より「うけもちノ神目ひたいにあわひえ五こくはえたる所」（江戸科学古典叢書 39）

（東三番街　平山由喜）